



第十九卷 第二號

(通卷第七十四號)

昭和九年四月發行

研 究

戰國武將、禪、その意義

柏 倉 亮 吉

(1)

この論文の目圖するところは、我國の戰國時代に於て諸侯が多く禪宗と關係を有する事實を見て、かゝる事實が如何なる歴史的意義をもつかについて一私見を提出しようとするものである。而してこの論文が要請せられてゐるものは、單に序説としての位地であり、従つて論述廣般に互り、細部に於ける引證は多くはない。若し、これに基いて推理上の缺陷があるならば、その責は自ら將來の機會に負ひたいと思ふ。

## 二

戰國時代の社會相として直ちに考へられることは、群雄割據といふ事であつて、多くの武將が各自廣き領國を有し、その領國に在つて自らの國を保ち、また他の領國を侵略しようとする事態である。かゝる戰國時代の武將として直ちに想起せられるものは特に言ふまでもなく、尾張の織田氏、駿河遠江の今川氏、關東の北條氏、甲斐信濃の武田氏、越後の上杉氏、東北の伊達氏、越前の朝倉氏、中國の大内氏、毛利氏、九州の島津氏、大友氏、土佐の長曾我部氏等である。而して競ひ立つ此等數多の武將に於て、その關心が自らの領國を確保し又領國を増大すること、即ち當時の所謂國持ちに向けられてゐたことは當然である。當時越前に於ける具眼の土朝倉宗滴が談じた次の言葉はよくかゝる國持ちに關する切なる關心を示してゐるといへる。

一、當代日本に國持の無器用、人つかひ下手の手本と可申人は土岐殿、大内殿、細川晴元三人也。

一、又日本に國持人つかひの上手よき手本と可申人は今川殿義元甲斐武田殿晴信三好修理大夫殿、長

尾殿、安藝毛利殿、織田上總介殿、關東には正木大膳亮殿此等之事

かゝる關心はたゞに朝倉宗滴一人に於て示されてゐるものではなく、後述する如く多くの戰國諸侯に於て現はれてゐるのである。而してかゝる關心が大いにまた特異に起つて來る理由は、思ふに戰國武將の生活と必然的な關係をもつといへるであらう。何となれば、戰國諸侯の生活に於ては、一面に

は外部より來る多大なる苦難危險が常に領國に及ばんとし、又一面には内部自らの軍國統制に際して銳利なる洞察及び果斷なる實行等の性能が必要とせられてゐる事實があるからである。而して、戰國諸侯の生活に於けるこの二つの方面は、所詮一切を率ゐて立つべき強大なる意欲を具有する國持人つかひの才能によつて巧みに克服せられて行くであらう。

元來戰國諸侯はその領國に單に警察權を行ふのみではなく、一切の權力を行使してゐる。従つてその領國は多數の人民を諸侯の意志命令に従つて行動せしめる一つの有機組織であるといふことが出来る。而してかゝる組織にあつては、第一に領民をして領國の目標とする所に向かせるために一定の規定を必要とする。之によつて一國として許すべき行爲、許さざるべき行爲を明かにして、こゝに大規模の政治組織を組成せんとするのである。戰國時代に多くの諸侯によつて作られたところの家法、例へば大内家の壁書、伊達家の塵芥集、武田家の法度、長曾我部家の百ヶ條、朝倉敏景十七箇條、早雲寺殿廿一箇條等はそれが、法治主義の精神をもつか徳治主義の精神をもつかの問題は兎も角として、右の如き廣き軍國を一方向に向けて統率せんとする強き意慾を含むものであることは確かである。而して、かゝる戰國の統制に於ては、諸侯自らが領國を運用する最樞機に立つべきものとしてあるのである。朝倉宗滴がまた、

主人、内之者の覺悟よく見知らずして執分召仕候事不覺也、その故は後難をも辨へず、當座の得手

方ばかり馳走仕候を正直の奉公人と心得、別面目をかけ召仕候事併家を滅亡候基也、

といつてゐる。これは右に云ふ戰國時代領國統制の最樞機に立つ諸侯の洞察力の必要をよく現はしてゐると言つてよい。また北條氏康に關する逸話に、氏康が子氏政の食事するを見て、涙を流して歎じて「北條の家も我一代にて終るならん(中略)今氏政の食するを見るに一飯に汗を二度かけたり、一飯に汗をかくる積りすら知らずして二度を重ねるは不器用なり、朝夕なす所さへ不器用なれば一皮内にある人の心府を積り、人の目利せんこと未來永劫あるまじきなり、目きゝなれば良き武士をもたざれば當代は戰國の折柄なれば、我明日にも死せんには賢大將廳て隣國より亂入し、氏政を亡すこと疑なし。さてこそは北條の家は我一代にて終れりと申せしなり」と談つたと傳へてゐる。これも戰國時代の領國統制には不斷に精神の緊張の必要なることを示したものとすべきである。しかも此等の例に於ては、武將その人の眼が日常生活に端的に向けられてゐることを見るべく、それよりして終に説く如き現實的精神が進められて來ることを考へ得るのである。

## 三

上述の如く外よりは絶えざる危険が襲ひ、内には不斷に緊張せる精神を以て領國を統制すべき戰國時代に於ては無事に過し、自國を保ち行くに優れたる素質を領主は必要とするであらう。松永貞徳が細川幽齋を辯護したことばに「手のうらをかへす様な亂世に無事にすくし給ひし名大將をよはき所

ありなど、申さんは名歌に難義を求るがごとし」といふのがあるが、それは亂國の危険と、またこの中に處理するには「よはからざる」素質を必要とすることゝを表はしてゐる。而してこのよはからざる素質とは、文弱ならざるところ、更に云へば、觀想的な才智ではなく、實踐的な統率力であるべきであらう。毛利元就の訓誡に「至當年于今迄四十餘ケ年、其内大浪小浪洞に他家之弓矢いかはかり轉變に候哉、然處元就一人すべりぬけ候て如此之儀不思議不能申候身ながら我等事けな氣者とうほ手ものにても智惠才覺人に越候者にても又正直正路者にて人にすぐれ神佛の御まほりあるべき者にても何の條にてもなく候處にかやうにすべりぬけ候事何の段にて候共更身ながら不及推量候」(瀬川博士の)とあることも統率者その人の人的才能に於ては、けな氣者とうほ手もの智惠才覺者なることが必要なることを言つてゐると解せられる。

經濟史家ゾムバルトは、その著近代資本主義に於て、歐洲近世史の初頃にみる軍隊を大將の個人的企業であるとして、大將に企業家としての精神が必要であつたことを説いてゐる。その企業の問題とは分析すれば、(一)征服者たる資質、即ち、障害を悉く打破る十分の覺悟と十分の強力とを具へること、(二)組織者たる資質、(三)商人たる資質即ち懸引の巧みさ等であるといふ。このことは思ふに我國の戰國諸侯にもあてはまることであり、諸侯の規模小さからぬ軍國組織の維持には、その成功の條件として如上の資質が必要であつた。國持人つかひといふ資質も分析すれば所詮右の資質を云ふに外な

らぬであらう。而して思ふにこれらの資質の根柢には旺盛なる自主的精神が存するのであり、また現實的な精神がそこに附隨して存するのである。

右の如き資質を要請せられつゝあつた戰國諸侯の時代は社會關係の變遷する時であつたといへる。應仁文明の亂及びそれに續く亂離が従前の社會に精神的にも經濟的にも大いなる動搖を與へたことは冗説を要しない。而して戰國諸侯の中には舊家名族の流れを汲むものありとはいへ、この混亂の時に於ける新たな發展こそ彼等を戰國諸侯たらしめたものであつた。即ち戰國諸侯は應仁文明の亂以後の混亂によつて舊き社會關係が拂はれ、新らしきそれが起りつゝあつた時に表面に出て來たものゝ一つである。而してこゝに新らしく興つて如上の資質を要請せられつゝあつた戰國諸侯と同時に、それに應ずるものとして松源派禪宗があつた。前に平安時代末より鎌倉時代初期にわたる動亂を経た時、そこに新たに興つた武士階級があり、その道義的規正者たる位置にあつたものが僧侶であつたといふことが西田博士によつて説かれてゐる。思ふにこゝにもその如く新興戰國諸侯に對して、その道義的規正者たるの位置を占めたものは松源派禪僧であつたことを考へることが出来るであらう。併しこのことをいふには我々はなほ歴史事實に於てみななければならない。

## 四

扱、こゝに多くの例證を必要とする。先づ東海の雄今川義元の例をとるならば、彼の戰略を助くる

ものに禪僧大原雪齋があつたことは已に注意せられてゐるが、こゝに特にかゝる關聯の一類型として頰を厭はず大原の經歷から略述してみようと思ふ。元來義元は幼時その地の善得寺に入つて天龍寺系の舜琴溪の下に梅岳承芳と稱してゐたのであるが、その時同輩として、九英承菊なるものがあり、共に並べられて二神足と稱せられてゐた。承菊は後に大原雪齋となるのであるがはじめ、京都の建仁寺の護國院常庵龍崇長老に侍して練磨してゐたのを、今川氏親が之を領國に招呼して承芳鬢年の進止を依頼したのである。その後東下した崇長老に就いて芳鬢年も雍髮し善得院を造つて之に入り、やがて兩人共に上洛して東山に掛錫した。その後今川氏が武田氏と刃を交へるに及んで東山を辭して善得寺に歸つた。天文五年三日承芳の長兄今川氏輝が歿したので承芳は還俗してその後を嗣いだがこの時承芳改め義元と庶兄東榮との間に起つた後繼の紛争には菊公も亦寸胸の工夫一臂の調略を盡すところがあり、その解決に貢献したといふ。その後も承菊は義元の仕事に與かつてゐたことは武田信虎の退隱に關して事に當つてゐることによつても知られる。而して自ら建仁寺系の文字禪に慊らず、本分の鍛練をなさんとして妙心寺の大休宗休に參することゝなり、法號も大原崇孚と改めた。後その域に達して大休からその畫像を興へられたのは天文十四年夏の頃である。かくして今川義元は自ら妙心寺系の禪風と關係をもつ様になり、天文十七年に兄氏輝の十三回忌の法會を行はうとした時には、大休宗休も遠く京都より下つて事に當り、大徳寺の大林宗套、妙心寺の明叔慶浚、大原崇孚等大徳妙心兩寺の

系統を以てこの式を行つたのである。而もこの時義元は自らも大休に對して弟子の禮をとり、改めて秀峰宗哲と號したのであつた。而して禪風上かゝる變異のあつた頃の大原の活働は、天文六年二月に北條氏綱によつて駿東を侵され富士河以東七八年間曠野とせられたに對し、義元を補佐して龍蛇陣上を馳せ回り、命を的にかけて必死を顧みず、豆相の強敵を征したと言ひ、西方に於ては天文十八年織田氏との衝突に際して今川徳川の聯合軍を率ゐて織田信廣の守る安定城を圍み之を人質にとり戰終つて信廣と當時織田方に人質とされてゐた松平竹千代とを交換するを條件として和議を結んだのであつた。吉田家日次記には「雪齋一段走舞也」と記してゐる。かくて天文十九年に大原は妙心寺に出世することゝなるが、それも暫らくにして歸つて駿府に居り、その地に十刹の建立を企てゝゐる。早く氏親から義元の補佐を頼まれたといふが、事實社會的な方面に於てまでも義元のみき助言者たる地位を占めてゐたとしてよい。

次で今川氏と領國を接する武田氏について言へばこれは已に渡邊世祐博士の精細な叙述があるから（史學雜誌第三十編一、二、三號）省略するが、信玄の佛教に對する關係は初めは歴史的關係ある天台、眞言等の舊佛教を信じ、後に深く禪に歸依するに至つたものであるといふ。天正四年四月、信玄の葬禮には妙心寺系の禪僧があづかつたが、鐵山は起骨法語をなして、「外學天台、内酌曹溪、澄桃海李、宗風一以貫」と言ひ、東谷は掛眞法語をなして、「外着天台伽梨、到究竟卽極樂、内唱關山佳曲、興佛



心宗紹隆」と言つたことは特に彼が妙心寺系の禪宗に對して深かつたことを表はすものとしてよい。永祿四年十月甲越兩軍が川中島に戦つたその翌年五月快川が信玄に狀を送つて、「甲軍威風遍天下、武名高日本（中略）蓋是關山一派再興基乎」と言つてゐる如き、信玄と妙心寺系の關係をよく現はしてゐる。彼によつて請せられた禪僧としては先に相國寺の惟高妙安、天龍寺の策彦周良があり、ついで明叔慶浚、希庵玄密、岐秀天伯、快川紹喜等の妙心寺系の禪僧が請せられて惠林寺に住してゐる。なほ渡邊博士の擧げられなかつたものに大徳寺系の殷英宗佐首座があり、甲陽の牧主として甲信兩州の城下、法華、長松、普門の三寺に住して六七年を経たことがある。信玄の詩集を仁如集堯に示して跋文を求めたのもこの僧であつた。又先にあげた相國寺の惟高も大徳寺の徹岫宗九に參學したものであり、宗九の示寂に際しては香を懷いて來り追和したのであつた。ともかくも甲陽軍鑑に「信玄公臨濟家の佛法御參得故か一切の様子臨濟八境界のごとなり、と各禪宗知識申され候、八境界と云は抑、揚、褒、貶、擒、縱、興、奪、是也、まことに信玄公御一代なされ候事をあら／＼書きしるし候へば定つて定りなし、定りなくして定御座候」とあることは彼の行狀には參禪によつて得るところ多かつたことの證とせられるといひ、それは信玄家法に

一 參禪可嗜事、語曰、參禪別無祕訣、唯思生死切

なる一ヶ條の存することゝ思ひ合せらるべきである。

更に關東に雄飛する後北條氏について言へば、その祖早雲は永正十六年八月韭山にて病死するや、遺命して大徳寺の禪僧以天宗清を招かしめその菩提寺を建てしめんことを委囑したといふが子氏綱は箱根山下に一字の伽藍を創建し金湯山早雲寺と號し、以天宗清を開祖とした。山門佛殿法堂鐘樓食堂以下に至るまで壯麗奇麗を盡したといふが、天文の頃には輪奐の美間然するなき狀を示し、以天宗清なほ住持として國守の歸仰を得て宗門を輝かしてゐた。

越後の上杉謙信に至つてはその家が以前より曹洞宗と關係深く彼の號不識も曹洞宗の僧より與へられたものであるが、なほ早く廿四歳にして上洛した時大徳寺に至つて三歸五戒を徹軸宗九に受け、宗心なる法號を得たことがある。宗九は清庵宗胃、古岳宗亘、大林宗套等の大徳寺僧と共に後奈良天皇の歸仰を忝うし且つ金字華嚴經及び袈龍御衣を賜はつたといはれ、他面法子怡雲宗悅と共に大友宗麟の歸依を得たのであつた。上杉謙信が早くこの僧を訪れて受戒したことは彼も大徳寺系の禪風に望みを掛けてゐたことの一證とせられてよい。

更に畿内にあつて當時權勢雙びなしと言はれた三好長慶は大徳寺系の大林宗套に參禪した。大林和尚の塔銘に長慶が平素語つて敵に當つて利堅なるものは彼摧するが和尚の猛威には敵し難いと言つたことを記してゐる。長慶死後の肖像に咲嶺和尚が賛して「參徹南宗禪話柄、平常作略類龐裴」又「晚會臨濟禪、眞諦俗諦不二」とあるのも彼の參禪あつたことを示してゐる。

尾張の織田信長についてはその父信秀の歸依した僧は妙心寺系の澤彦宗恩である事實があり、澤彦が信長と長く接してそのために信長なる文字を選んだこと、政秀寺の開山となつたこと、岐阜城の名を選んだこと、天下布武の印文を選んだと傳へられることは普く人の知るところである。また妙心寺の南化立興が策彦に推されて信長のために安土山記を作つたことも著名な話である。天台宗、一向宗、日蓮宗等に對しては反意を見せてゐる信長が、禪宗に對してかゝる態度を示したことは注意すべきである。澤彦との長き接觸の内に、禪宗が信長の精神生活に幾何のものを寄與してゐるかその證迹はなけれども、信長の行動に拘泥しない自由さ、強い自主的精神の現れてゐることはそこに相通するものが見られる。

周防の大内氏はまた歴代曹洞宗に信依してゐたが義隆に至つて大徳寺系に歸し、玉堂宗條に就いて三玄密旨を究明し、その法號も宗雄としたことが畫像の贊によつて知られる。之を大内義隆記には、「紫野玉堂和尚を申下されては參學の師範として座禪の床にあがり、八境界の月を澄しては無明の闇を拂ひ、觀念の窓に向ひては三蒼の心を窺ひ給ぬ」と記してゐる。玉堂は天文五年に大徳寺に出世し翌年十月再住したが、その後は寂年までこの地方に在つたことが知られる。但し義隆は末期には復た曹洞宗に歸しその弟子になつたといふ。續いてこの地方を領した毛利元就は東福寺の僧竺雲惠心と近く接し、その斡旋によつて朝廷に御即位料を献上したことがあつた。

更に豊後の大友宗麟は若年にして先にあげた徹岫宗九及びその法子怡雲宗悦を景仰し、徹岫には河南庄之内松武名百貫文を瑞峰院に寄せて累代の墳寺となし、又之より法號を受けて弟子の禮を執つた。宗九の滅後は怡雲宗悦の徳を慕ひ、永祿元年の怡雲の大徳再住もその懇情によるものであるといはるゝところであり、ついで領國豊後に文珠、壽林の兩刹を創建して元龜三年以降怡雲を請じて住せしめてゐる。その族吉統、義延亦怡雲和尚を景仰したといふ。

なほ一例を挙げたいと思ふのは越前にあつて戰國諸侯の國持人つかひの巧拙に注意を拂つてゐた朝倉宗滴である。この一族が大徳寺眞珠庵に關係あつたことは同庵所藏の文書によつても知ることが出来るが宗滴自身の述懐にも次の如くある。

一我々不斷の形儀随分可嗜とは存候へども毎々比興なる氣遣は出來安きものにて候紫野の眞珠庵飯尾宗善とて入道僧之一段耻敷大老に候、彼仁障子越に置申、不斷しやさう仕度念願(下略)乃ち宗滴が日常生活の形儀規準を聽くべき人として大徳寺系の一段耻敷大老宗善に期待をかけてゐるのであつてそのことは思ふに上述の數個の例に於てその關聯の根柢に共通に存すべき心構えを表はしたものであるのではないだらうか。

上述の數個の例證によればわが國の戰國時代に國持上手の名のある武將は多く禪宗とそれと關係をもつてゐるといふことが出来る。勿論かゝる關係には武將によつて相違するものがあり、信仰の程

度その經歷等の點に至つては多様な相がみられるであらう。しかもなほ、之等の場合に通じてみらるゝ一つの事實は禪宗僧侶が武將の近くにあつて、それ／＼の程度に日常精神生活の指導者たる位置を占めてゐるといふ一事である。宗滴のいはゆる「不斷しやさう仕度」なる言葉はかゝる日常精神生活の指導を需むる聲とすることが出来る。こゝに於て先に云ふところの鎌倉時代の新らしき社會關係の發生に際して新興佛教僧侶が道義的規範を與ふる位地に立つたと説かるゝその關係に似るものが戰國時代と禪僧との間に於てもみられるといつてよい。

併し乍ら更に言へば問題はこゝに止まるのではない。こゝに禪宗僧侶といふ語を用ひたけれども上述の數個の事實はこの概念のみを以てしてはなほ言ひ盡されないものがある。それは、嚴密に言へば禪宗僧侶の代りに大德妙心兩寺の系統の即ち所謂松源派の禪僧と言はるべきである。已に個々について述ぶる如く、今川氏には妙心寺系統が新に來り、武田氏にも主として妙心寺系統が新に來り、上杉氏には曹洞宗であるがなほ謙信は大德寺系に對する接近があり、朝倉氏には大德寺系統、北條氏には大德寺系統、三好長慶には大德寺系統、織田氏には早く信秀の時妙心寺系統の接近があり、大内氏は從前曹洞宗であつたのに義隆に至つて大德寺系統への接近があり、大友氏も亦大德寺系統に景仰してゐる。之を以てすれば、われ／＼は、戰國諸侯の大いなるもの、所謂國持人つかひの上手といはるゝものは、悉くではないとしても概ね大德妙心兩寺の系統即ち松源派禪宗と關係があり、又それに向ふ

傾向があつたといふことを事象の上にいふことが出来るであらう。而して、そこにはまたその契機があるであらう。

## 五

所謂松源派禪宗と諸侯との關聯の事實は右に説く如くであり、その關聯に問題は潛むと思ふのであるが、この關聯の契機を考察するに先だつて、松源派禪宗の如何なるものなるかを明かにしなければならぬ。右に言ふ松源派禪宗とは臨濟禪の内、特に、宋の禪僧松源より傳はる法系に便宜上附けられた名稱である。この系流を我國に於ては南浦紹明が渡宋して虛堂より受け傳へて居り、之が宗峯妙超より徹翁、關山等に傳へられ、徹翁の系統は大德寺に、關山の系統は妙心寺に流傳せられ來たのである。はじめこの系統は我國に於ては他の臨濟禪に比較して社會の表面に出づること少く、足利幕府の支持する五山十刹にもその名を連ぬること少ない。併し戰國時代以降は兩寺共に禪風に於て注意せらるゝ様になり、その檀越に戰國武將が多く見出される。而してこの流派が表に出てくる半面には從來表面に立つてゐた他の臨濟派が漸次影を薄めて行き、徳川時代になつては從來の五山十刹はそのまゝあるとしてもそこに傳はる法系は殆んど全くこの松源派によつて占められてくるのである。

この松源派に流るゝ特長は、已に松源その人が南宋に於て臨濟の正宗を掲起した大眼目者であつたといはるゝ如く、それを承繼して、我邦に入つた當初より機鋒鋭い禪風、實踐に於ける嚴重なる練磨

といふことにあつた。而してその性質はその法流に深く流れ傳はり、足利時代後期に於ては、他の臨濟派が漸く文字禪にならうとする傾向あるに對し、漸次その特長が認められつゝあつた。例へば大徳寺の大林宗套の幼時、即ち明應頃の事として、次の如き事が傳へられてゐる。

應仁文明以降五峰智識以著述如已任、佛經儒書相半而閑講筵

乃ち足利中期より、五山派には學文を重んずる傾向が著しく起つて來たのであり、禪本來の實踐的趣旨と相違する傾向があつたのである。この故に大林は歎じて「文章一小枝耳、非于心法、不如就明師」となし、適々宗牧東溪が大燈國師の法道を龍寶山に説いてゐると聞いて之に就き、朝に鍛え夕に練つて年ありといふ。また、大永年間には建仁寺の僧龍崇が、大徳寺の實傳和尚を評する言に、

趙宋既南之後、破沙盆下諸師、揭起臨濟正宗具大眼目者、惟老松源一人而已、五傳而至本朝大燈國師宗峰、其悟門之宏大也、機鋒之精銳也、肯不下於老松源也、大燈又五傳而得正續大宗禪師

とある。建仁寺系の龍崇がかく松源流の禪を賞揚するのは全く當時禪風に於ては大徳妙心二寺が他よりも著しく勝つてゐたことを證するとしてよい。先に觸れた大原崇孚がまた、平生茶話に

吾在東山(乗拂)勞苦已百日唯學文字禪、不祖師禪、隨在葛藤窟裡失却本分草料(中略)嗣橫岳之宗風唱關山之家典

と言つてゐるのも同様の事情を示すものである。この派の僧が、當時口を開けば「逢祖殺祖、逢佛

殺佛」或ひは「不受佛祖瞞」の言を放つてゐることも、この派に流るゝ強き自主的精神、又、自由の精神の現れとみるべきである。クラッセが日本西教史に於て

「第一強暴なる宗派は之れを禪宗と稱す、其僧は只現世生活のことを説き、鬼神、天堂、地獄のあるを信せず、人身死する時は皆悉く消滅せざるもの無きを信す、故に死後の幸福を望むことなく亦恐怖すべき者もなし」

と記してゐることは當時のこの宗派の主張を明瞭に云ひ表はしてゐる。

## 六

「よき弓取りと佛法者とは用心同じこととぞ申すめる」斯波義將が竹馬抄に於て言つてゐるこのことは武人と禪との關聯の精神的契機を早く言ひ盡してゐるものゝ如く見える。その言ふ所は武人の絶えざる精神的緊張自己鍛練の仕方は佛法者の眞摯なる精神的鍛練と同じことなるを言ふのであらう。この兩者の類似性に對する認識が早く武人の側にも起つてゐることは注意するに足るものであり、而して更にかゝる武人が多くついたところの佛法は禪宗であつたといふことも一層注目し値する。このことに關して、連歌師宗長の手記によれば

一、參禪學道の人あり、かたき大切の人なるべし。しかはあれど、なまゝの參禪、都鄙隨分の侍多く進退を損ず



とあつて、享祿年間には都鄙おしなべて侍の趨つたものは參禪であつたといふことが認められる。

一般的に言へば、足利時代に、社會に最も廣く行はれて居つた佛法は、一條兼良に従へば禪宗と淨土宗とであつたが、その前者に於ては、自主的精神が強くと働いてゐることが言へるであらう。それは淨土宗が他方本願であるに對し、禪宗は自力を宗とするといふ一般論から推し得るのみでなく、また宗長の次の如き言によつても事實に於て當時かゝる風潮の存したことを見るべきである。

參者を接し、我身接する知識たれども聞えず中々念佛三昧こそあらまほしき修業ならめといふ人侍り、かゝるともこそ床しくも侍れ、是つらは我等かやうの愚痴暗鈍の修業にこそ侍れ

この宗長は一休和尚に參じた人であるが、この人にして、念佛三昧こそあらまほしき修業なれとの言を聞いたとき、是つらは我等様の愚痴暗鈍の修業にこそ侍れとの懐ひを述べたのである。この述懐の言葉は興味ある問題を含んでゐるが、併しこゝでは當時淨土教と禪宗とを比較すれば淨土教には愚痴暗鈍の身といふ意識がもたれ、それに比較して參禪の方には強い自主の精神が保たれてゐた風潮を知り得ればよい。而してこのことは日本西教史に於て禪宗淨土宗法華宗の特質を比較した記述に於てもみとめられるのである。

かくして見れば精神の不斷の緊張をもち、自主的精神を生活に於て促されつゝある戰國武將が、社會倫理動搖の後をうけて、禪に多く到るべきこと、又、事實到つたことの契機は理解せられるであら

う。而もこの際當時禪風をもつとも強く保つて居り世も亦之を認めてゐた一禪派即ち松源派に到つたことは自ら理解せられるのである。或ひはこの接近の事實には原因として諸多の可知のまた不可知の事情があげられるであらう。併しこゝではかゝる關聯の原因を窮めるのではなく、たゞかゝる關聯の例に於ては多く武將が日常生活の規範を聞くべき人として禪僧に接してゐることの契機を見れば足るのである。武田信玄が參禪可嗜事の一條を家法に掲げたのみならず、またその行業に於て多くを禪より得たところあるを示す如き、朝倉宗滴が規範を示すものとして大德寺禪僧を囑してゐる如き、さては又、早く三好長慶が大德寺派の大林宗套に參じて、人に語つて

吾平生當敵、而利者彼之、堅者摧之、今見和尚猛威、難其機鋒也只是度越數萬甲兵者乎

となし、和尚の住する南宗寺の四邊を過ぐれば必ず下馬したと傳へる如き、何れも事實みらるゝ禪との關係に於ては武將がそれによつて、自らの精神的鍛練を目ざしてゐた一傾向が窺はれるのである。

## 七

上述するところは戰國諸侯と松源派禪宗との關聯の事實である。然らばこのことは如何なる意義を持ち得るであらうか。私の觀察によるならばこのことの意味は、松源派禪宗の精神傾向が戰國時代に到つてその社會性を獲得するといふことである。思ふに松源派なるものが説かれたのは已に鎌倉時代に鎮西に於て初まつて居り、京都で説かれたのも鎌倉南北朝兩期の交にあり、それより戰國時代に至

るまでは年已に久しい。然し乍ら、この間この禪派が已に二三の信奉者をもち、又傑僧を出してゐるといふことはあつても、なほそれは社會性として多くを主張し得ない様に見える。而して之が強くと社會性を確立するのは戰國時代に於てあると思はれる。即ち松源派の禪風は戰國時代に至つて強く社會に受け入れらるゝに到つたものであり、逆に言へば社會精神はこの時に至つて松源派の精神傾向をとり入れるに到つたのである。而してこの時松源派の精神傾向の社會的荷擔者は適々新たに興つた戰國諸侯であつたと考へるのである。

こゝに松源派禪風の精神を考へるならば、それは甚だしく自主的な精神を帯びてゐると言ひ得よう。先に引く西教史の記述に於てもそれが表れてゐる。前田利謙氏のことばによれば、臨濟は或る意味から言へば、自己を徹底的に解放して活かさむがために非我——客觀界を殺戮してその實在性を奪ひ去り、又自己の活動を可能ならしむる環境を創造せむがために再びその實在性を確立するとも言ひ得ようといふ。即ち、一切は自己に依つて征服され、且つ支配せられんがために存在するものであり、そしてその征服支配とは直ちに又自己そのものもない心々不異の遊戯であるといふ。思ふにこの意味の自我の主權を確立すること、従つて自由人としてあることのために自己の自由と主權とを阻害する一切の對象、一切の觀念は破壊されねばならない。この立場よりすれば佛法生活と人間生活との差別即ち聖俗の差別は亦人間の自由を束縛する反生命的價値觀である。

先に言ふ如く臨濟の正宗を傳へるものが南宋以後は松源派にあり、我國に於ては大徳妙心の兩寺がその流れを汲むものであつた。早く日本に於けるこの派の師祖ともいふべき大燈國師に參じ給ふた花園上皇が御記せられた文に、

先云世法云佛理不可有二事也(中略)

中古以來以造寺爲本、佛寺之美麗爲先、太以背佛法事也

とある。それはこの派が強くまた端的に主張するところの聖俗不二の傾向を最も早き時に又最も鮮かに表はされたものである。而して戰國時代に於ても大林宗套が天文二十年に自らの頂像に贊をして、冒頭に「本有天真性顯天地」と記してゐる如き、屢々用ひられる言葉ながら、なほ如上の立場を、しかも人間的性格を多分に表に出してゐることが見られる。

この宗派が戰國時代に武將と例多く關聯し來る歴史的事實は、それがやがて社會精神に於ては、人間生活の肯定、人間世界の擴大その高揚をもつて來たことを表はすものであると考へる。大徳寺の入道僧に「やさうせん」とした宗滴の如きもその目圖するところは、不斷の形儀に出來安き比興なる氣遣に回換せらるゝことを斷じて不斷に豎立せんとすることであつた。また、晩に臨濟禪の眞諦俗諦不二を會したといふ三好長慶は、その七回忌に記された同じく咲嶺宗訥の贊によれば「平常作略類龐衣、按成一劍定天下」といふ。又武田信玄は家法に「參禪可嗜事」の一條を設けたが、その參禪なるもの

も、彼の註釋によれば「參禪別無祕訣、唯思生死切」といふことにあつた。即ち參禪とは武人の生活から離れたところに祕訣あるのではなく、たゞ武人としての日常生活に於て生死を思ひ切るところにあると説くのである(群書類從所收信玄家法に「は思生死切」としてゐる)。こゝには明かに實生活佛法不二なる趣旨が武將の實踐生活に於ては實踐的意力の肯定、又その増進として働らきつゝあつたことを見るべきである。信玄の談話に「國持の武功なくして花車成は結句賤しきにたとへたり、又國もちの武篇して無能なるはいたりて花車なる」又、「學と云ふは物をよむばかりにあらず、おのれゝが道々に付てまなぶを學とは申すなり」とあるのは正に禪に對する彼の態度と應じて日常生活肯定の自覺を示してゐる。

思ふに武將によつて懷かれた現實生活肯定の精神はそれ〴〵の武將によつて表現せられてゐるのである。早くは早雲寺殿二十一箇條に「あるをばあるとし、なきをばなきとし、ありのまゝなる心持、佛意冥慮にかなふと見えたり、たとひいのらずとも此心持あらば神明の加護有之べし」とあるのは、武人等のありのまゝなる心持、現實生活以外に聖なるものありとすることに對する抗議とも見える。又織田信長がふだんに小うた「人間五十年下天の内をくらふれば夢幻の如くなり、一度生を得て滅せぬ者の有へきか」を好んで口付け、田樂狹間に出陣するに當つてもこの舞をなしたといふこと、及び彼が常に「死のふは一定、しのひ草には何をしよそ一定かたりをこすよの」をうたはせた事に於ても、信長にあつては死の觀念が日常生活又は俗的生活を逃避せしむることに働かず、却つて武人としての

日常生活に於ける實踐力を促すことに働くものであつた事實を見得る。日本西教史の信長に關する記述は又彼の自主的精神の旺盛さと同時に、現實的精神が漲つてゐたことを示してゐる。更に毛利元就の談話に「武士の佛法を學ぶことは生死の不遁事を知る時は武道潔くして死を善道に守る、きとうをするは下愚の者をして惑を晴れ心を頼もしくせんためなり、智識を近付而は書籍を談じて其理を聞て我道に益ある所を用ふるは良將の信仰なり、我道を棄は佛法に歸するは非なり」とあることも同一の戰國武將の精神を現はしたものである。之等の例に於てはそれが禪との關係の結果であるか素地であるかを論議することなくとも少くとも松源派禪風の精神傾向がその最奥の形ではないとしても、その現實肯定の面に於て今や社會性を強く帶び來つてゐることを見ることが出来る。松源派禪僧が多く戰國武將の傍にあることの意義もこのことに見出し得るであらう。

かくして我々は社會的に人間世界の擴大、高揚が今や來りつゝあることを知ることが出来る。力なき觀念の世界を考ふることではなく、具體的な生活に足を立てようとする心が來つゝあるのである。それは思想としては已に存したであらうけれども、更に實踐的に従つて又力強く現はれて來たのである。それは言はゞ二元的な世界觀を脱却して現實生活を基とする一元的世界觀への趣向である。而してこの時先づこの精神傾向の社會的荷擔者として戰國武將があつた。その所以は武將の境遇なる實踐的態度の要請、またそれに伴ふ意慾の伸張といふことが大いなる契機としてあると思ふ。而してこ

る。  
ゝに自分は社會精神として我國に於ける近世的自由精神の胚胎を見ることが出來ようと思ふのである。